

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	鏡 原 崇 史
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">自閉スペクトラム症者の表情表出に関する研究 – Facial Action Coding System を用いた形態的特徴の分析 –</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="text-align: center;">主 査 教 授 若 松 昭 彦 審査委員 教 授 川 合 紀 宗 審査委員 教 授 七 木 田 敦 審査委員 准教授 林 田 真 志</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>自閉スペクトラム症（以下、ASD）者は、定型発達者とは異なる特有の表情を表出し、その表情は、他者から不自然や奇妙と認識されることが報告されている。しかし、特有とされる ASD 者の表情の実態は明らかにされていない。これらをふまえ、本研究は、異なる状況で表出された ASD 者の表情の部位ごとの変化を、Facial Action Coding System（FACS）と呼ばれる顔面動作の分析手法を用いて捉えることにより、特有とされる ASD 者の表情の実態を明らかにすることを目的としている。</p> <p>論文は序論、第1部、第2部、第3部、第4部で構成される。</p> <p>序論において著者は、表情表出が少ない、情動がわかりにくい、他者から不自然や奇妙と認識される、といった ASD 者特有の表情の存在が古くから報告されてきたと述べている。そして、表情が重要な非言語コミュニケーションの1つであること、ASD 者特有の表情の存在が印象形成においてネガティブな影響を与えていることをふまえ、ASD 者の表情表出に関する研究の絶対数が少ないことに警鐘を鳴らし、その必要性を指摘している。さらに著者は、先行研究では、情動カテゴリーの分類やリックカート尺度による表情評価法が採用されており、具体的にどのような形態の表情が、どのような状況において表出されているのかについては明らかにされていないことを指摘している。これらをふまえ、第2章の「本研究の目的と論文の構成」では、本研究の目的として、解剖学に基づいた顔面動作の評価方法である FACS を用いて表情を分析し、①ASD 者特有の表情が表出される状況、②特有とされる ASD 者の表情の形態的特徴、を明らかにすることが示されている。</p> <p>第1部は、以下の2つの研究で構成されている。研究1では、情動を喚起する事象に対して、ASD 者が経験する情動の種類及びその強度について調べることにより、ASD 者が経験する情動の特性について検討を行っている。その結果、ASD 者も強弱さまざまな複数の情動を経験しており、ASD 者と定型発達者が経験する情動の種類やその強度が類似していることが示されている。研究2では、非社会的状況で表出される ASD 者の自然表情の特徴について検討している。その結果、ASD 者と定型発達者における自然表情の類似性が傍証され、生得的な心的状態と顔面動作の対応関係は ASD 者においても損なわれていな</p>			

い可能性が示されている。

第2部では、研究3において、社会的状況におけるASD者の非言語コミュニケーションについて検討している。具体的には、初対面者に対して自己紹介を行う、また、初対面者の自己紹介を聞く場面におけるASD者の表情表出及びうなずきの頻度について検討している。その結果、ASD者はコミュニケーション場面において、笑顔や会話の信号としての表情の表出が少ないこと、話者に対する同調のシグナルであるうなずきも少ないことが示されている。

第3部は、以下の3つの研究で構成されている。研究4では、ASD者が情動語に合わせて意図的に作る表情の形態的特徴について検討を行っている。その結果、ASD者の意図表情は、各表情を構成する主要な顔面動作が欠けた表情であることが明らかとなった。次に、研究5では、作るべき表情の見本を示した状態でのASD者の意図的な表情表出能力について検討している。その結果、ASD者は、作るべき表情が示された状況においても、意図的に表情を作ることには困難を示すことが明らかとなった。研究6では、ASD者の意識的な表情筋の制御能力について検討がなされている。その結果、ASD者は意識的な表情筋の制御に困難を有することが明らかとなった。

第4部は、第1章「総合考察」と第2章「今後の課題」で構成されている。「総合考察」では、ASD者特有の表情が表出される状況として、①社会的状況、②意図的に表情を作った状況があげられている。そして、表情の形態的特徴に関して、社会的状況においては、①笑顔に関連する顔面動作、②会話の信号としての顔面動作の生起が少ない、という特徴、意図的に表情を作った状況においては、③表情を構成する主要な顔面動作の欠如、といった特徴があげられている。そして著者は、このようなASD者特有の表情が表出される背景には、表情筋制御の困難やASD者における表情のコミュニケーションツールとしての認識の欠如が影響している可能性に言及している。「今後の課題」では、日常生活で表出される表情に関する検討やASDという障害における個人差に関する検討などがあげられている。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. これまで特定されていなかったASD者特有の表情が表出される状況について、①社会的状況、②意図的に表情を作った状況という具体的状況を示した点である。この知見は、対人関係やコミュニケーションの支援法の開発に寄与するものであると言える。
2. 奇妙、不自然、情動がわからないといった抽象的表現を用いて報告されてきたASD者の表情について、具体的にその形態的特徴を明らかにした点である。長年明らかにされてこなかったASD者の表情の形態的特徴を明らかにした学術的意義は大きい。
3. ASD者特有の表情が表出される要因について、6つの実証的研究を通して、表情筋制御の困難及びASD者における表情のコミュニケーションツールとしての認識の欠如が影響していることを示唆した点である。この知見は、自然な表情を表出するための学習法の開発に寄与するものであると言える。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和2年 2月 10日